まちのチカラになりたい、
まちのチカラを求めたい、
まちのチカラを応援したい

はこだて「まちのチカラ」サポートデスク

アクティブシニアの活躍も応援！

http://www.hakomachi.net

八月は毎日、厳しい夏日の連続だった。九月の雨は爽やかな西風をよび、空高く真綿をそーっと引き裂いたような雲が、軽やかに浮かんでいる。

赤煉瓦造りの旧郵便局本局を覆う蔦は、葉先をちょっぴり紅葉させ、まるではにかんでいる様だ。コツコツと石畳の響きを自転車のサドルに感じながら、明治館の前を横切る。異国人観光客の言葉は、明るく弾んで耳に心地よく、そのイントネーションを楽しみながらゆっくりと漁連の角を曲がる。

急に視界が開け、海に浮かぶ緑の島が飛び込んで来る。赤と白に塗り分けられた巨大な門型クレーンの、あの懐かしい姿がないのは如何とも残念だ。

港は鏡のように凪いだり、沖を白兎が飛び交ったり、お天気次第で刻々と表情を変える。鈍色やローヤルブルー時には群青と、終日ベンチで眺めていても飽きる事はない。

潮風は足もとをくすぐり、臥牛山から吹き降りる樹木の香りは髪を撫で、函館を肌で感じる季節の到来だ。

秋になって空気が澄み渡り、ますます魅力を発揮するのは『百万ドルの夜景』。「鉄道員」や「蒼穹の昴」の著者 浅田次郎氏は「天使の竪琴」の中で、『函館山からの眺めは無論、裏夜景から観ると光が山の方へ駈け登り、まるで天使が竪琴をそっと立てかけたようだ』とおっしゃっていたのが印象的だ。

宝石箱をひっくり返したような色鮮やかな光の束に、両側から漆黒の海がきゅーっと押し迫り、沖には漁り火の数珠が連なっている。

～～誰かに住む街聞かれたら～
函館賛歌の歌詞そのまま、誇りを持って
～～はい、函館と答えます～～

佐藤 綾子 さん

ご主人と娘さんの江差追分の舞台のために着付をしたいと思ったのがきかっけで、昭和 53 年、函館和装研究会の着付教授を取得。取得と同時に自宅で着付教室を開く。平安閣と国際ホテルの衣装部にて婚礼着付にたずさわったこともある。

まちセン３階では「はこだて『まちのチカラ』サポートデスク」を開設しています。
窓口は、年中無休　9：00 ～ 17：00　地域のチカラを求めています。